

2021年度入試概要分析

今年も各大学の次年度入試概要が出揃った。ここでは来春入試における大学の動きや主な入試変更点について、注目すべき点をお伝えする。

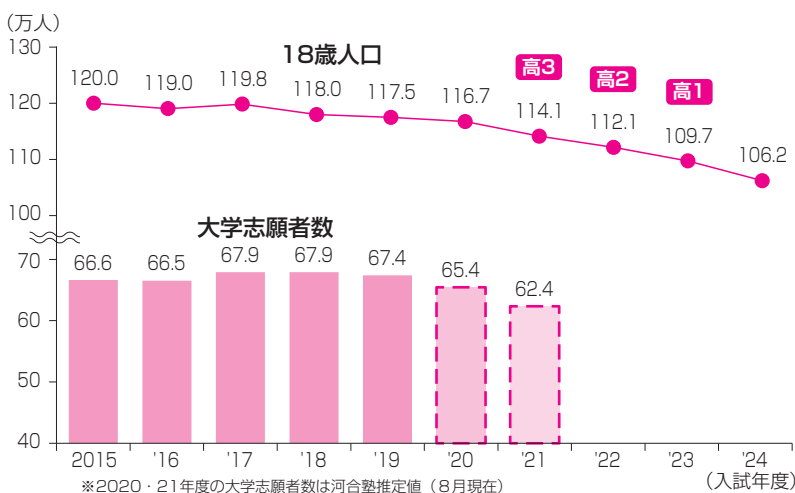
①2021年度入試の受験環境

■受験人口は減少期に突入、競争緩和は一層進む

【図表1】は2015年度以降の18歳人口と大学志願者数の推移である。18歳人口は減少期に入っており、2020年度の大学志願者数も前年から減少したものと推定する。このため、一般入試では国公立大・私立大ともに志願者が減少した。国公立大は前期日程としては過去最少の志願者数となり、私立大は14年ぶりの志願者減となった。私立大では合格者数も大幅に増加したことから倍率は大きく低下、競争緩和が実感できる年となった。

2021年度の18歳人口は前年から2万6千人減と今春以上に減少する。加えて2021年度から本格化する入試改革を敬遠し、今春は浪人を避ける動きがあったことから、2021年度の大学志願者数は今春以上に大きく減少する見込みだ。競争緩和はさらに加速していくことだろう。

【図表1】 18歳人口・大学志願者数の推移



■2021年度から変わる大学入試

2021年度入試はいよいよ入試改革が本格化する。大学入試センター試験（以下、センター試験）は、大学入学共通テスト（以下、共通テスト）に変わる。一般入試は一般選抜に名称が変更され、主体性等を評価するため、調査書や志願者本人が記載する書類、面接、集団討論の積極的活用が促されている。推薦入試は学校推薦型選抜、AO入試は総合型選抜に名称が変更され、出願開始時期や、合格発表日などのルール設定や変更が行われる。各大学は学力を確認する評価方法（小論文、実技、教科・科目に係るテスト、資格・検定試験の成績、大学入学共通テストなど）の実施が必須となった。

各大学でこの変更に沿った動きがみられるが、詳細は後ほど確認する。

■コロナ感染症の影響で入試は複雑化

2021年度は新入試への移行だけでなく、新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ感染症）の影響が入試にも及んでいる。

文部科学省が公表した「令和3年度大学入学選抜実施要項」には、コロナ感染症対策に伴う入試日程や試験実施上の配慮等が盛り込まれた。

1) 共通テストー試験は計3回の実施に

2021年度の共通テストは、本試験2回と特例追試験の計3回実施される。本試験は第1日程(1月16日(土)・17日(日)実施)と第2日程(1月30日(土)・31日(日)実施)が設定された。第2日程は第1日程の追試験・再試験対象者のほか、来春卒業見込みの者のうち、コロナ感染症による「学業の遅れのため当該日程で受験することが適当であると在学する学校長に認められた者」が受験できる。例年、追試験は本試験の1週間後だが、来春の第2日程は第1日程の2週間後の実施となる。また、例年の追試験会場は全国2会場のみだが、第2日程は47都道府県すべてに会場が設置される。特例追試験(2月13日(土)・14日(日)実施)は、第2日程を疾病等が理由で受験できなかった者が受験できる。特例追試験は例外的な位置づけのため、緊急時(災害発生、情報漏洩等)に備えて用意されていたセンター試験の予備問題が利用される。このため、数学①の試験時間、英語の問題構成・配点等が本試験と異なる。

第1・第2日程で受験した成績の大学への提供は、例年より1週間程度後ろ倒しになる。これらの変更により、国公立大の一般選抜の出願締切日は2月5日(金)[当初予定2月3日(水)]へと延長されたほか、第1段階選抜の結果発表日、共通テストを課す学校推薦型・総合型選抜の合格発表日も後ろ倒しされた。私立大でも共通テスト利用型入試などで合格発表日等の変更がみられる。

2) 個別試験ー受験機会確保と出題範囲の配慮が求められる

各大学に対しては、追試験の実施や別日程への振替受験による受験機会の確保、学業の遅れを念頭に置いた出題範囲の配慮が求められた。出題範囲の配慮では、共通テスト、個別試験ともに検討が求められ、共通テストでは、地歴、公民、理科の2科目指定を1科目に減じる、指定科目以外の科目への変更(たとえば物理を物理基礎に変更)を認めるといった対応が、個別試験では高校3年次に履修することが多い科目(数学Ⅲ、物理、化学、生物、地学、地歴B、倫理、政治・経済)における選択問題の設定、出題範囲の限定といった対応が例示された。

国公立大では、多くの大学が一般選抜(前期・中期・後期日程)の追試験を実施する。追試験の対象者は各大学が判断するが、コロナ感染症罹患者、濃厚接触者に加え、コロナ感染者と確定していない一定の症状を有する者も含まれることになりそうだ。ほとんどの大学が、対象者・選抜方法などの詳細は12月までに公表される学生募集要項で公表するとしている。

私立大では追試を設定する大学と後日実施の試験への振替受験を認める大学に対応が分かれる。また、従来実施してこなかった3月入試の導入、オンラインで実施する新方式の導入といった動きもみられる。私立大についても全容が明らかになるのは、学生募集要項が出揃う頃になりそうだ。

もう一つの要請である出題範囲等の配慮については、国公立大・私立大ともに共通テストの出題教科・科目の変更はほとんどみられなかった。個別試験についても一部の大学で選択問題の出題、理科の出題範囲の変更といった対応を打ち出したものの、多くの大学は「教科書の発展的な学習内容からは出題しない」もしくは「出題する場合は、設問中に補足事項を記載する」といった程度にとどまっている。

3) 学校推薦型・総合型選抜にも配慮を要請

学校推薦型・総合型選抜についても各大学に対応が求められた。総合型選抜は、当初9月初旬から出願開始となっていたが、2週間遅れの9月15日からに変更された。また、中止・延期となった大会や資格・検定試験の成績等を評価する場合、結果を記載できないことをもって入学志願者が不利益を被ることがないように多面的・総合的に評価することや、ICTを活用したオンラインでの選抜など多様な選抜方法を工夫することが求められた。

各大学の選抜要項や入試ガイドを確認すると、英語資格・検定試験のスコアの代わりに英語の「学習成績の状況」を出願要件として認める、2021年度入試に限り出願要件から英語資格・検定試験の成績提出をはずす、競技成績を有するに相応しい競技力を持つと学校長が判断する者にも出願を認めるといった対応がみられる。東京大では、学生募集要項の中で、推薦要件を満たす客観的根拠が例年より提示しにくいことを考慮する大学の姿勢を明示し、潜在能力を含めた評価に基づき、ふさわしいと判断する生徒の積極的な推薦を求めるよう高校向けのメッセージを盛り込んだ。

ここまでみてきたように2021年度入試はコロナ感染症対応で複雑化しており、スケジュールも例年と異なる。**【図表2】**に2021年度入試スケジュールを示しているのので、参考にさせていただきたい。

【図表2】 2021年度 大学入試スケジュール

2020.8月現在

	国公立大学		私立大学 短期大学
	分離・分割方式	中期日程(公立大学のみ)	
2020年	7月31日まで	選抜要項(日程・定員・出題科目・時間・配点など)発表	
9月	9月1日	大学入学共通テスト 受験案内配付	総合型 選抜
	～10月8日	大学入学共通テスト 検定料等払込	
12月	～10月8日	大学入学共通テスト 出願	学校推薦型 選抜
	15日まで	募集要項発表	
2021年 1月	1月16・17日	大学入学共通テスト①(第1日程)	出願
	16・17日	大学入学共通テスト① 正解等の発表	
	20日	大学入学共通テスト① 平均点等の中間発表	
	～22日	学校推薦型選抜(大学入学共通テストを課さない場合)結果発表	
	22日	大学入学共通テスト① 得点調整実施の有無の発表	
	25日～2月5日	2次(個別)試験 出願	
	30・31日	大学入学共通テスト②(第2日程)	
2月	30・31日	大学入学共通テスト② 正解等の発表	一般選抜(2月)
	3日	大学入学共通テスト② 平均点等の中間発表	
	4日	大学入学共通テスト② 得点調整実施の有無の発表	
	13・14日	大学入学共通テスト(特例追試験)	
	15日～18日	2次(個別)試験 出願(特例追試験受験者)	
	～16日	学校推薦型選抜(大学入学共通テストを課す場合)・総合型選抜結果発表 ※特例追試験受験者は22日まで	
	～16日	第1段階選抜の結果発表(前期) ※特例追試験受験者は22日まで	
	18日	大学入学共通テスト 平均点等の最終発表	
	～22日	学校推薦型選抜・総合型選抜合格者の入学手続 ※特例追試験受験者は27日まで	
	25日～	前期日程試験	
3月	6～10日(公立は3日～)	合格発表	合格発表・入学手続 一般選抜(3月)
	～3日	第1段階選抜の結果発表(後期)	
	12日～	後期日程試験	
	20日～23日	合格発表	
	～15日	入学手続	
	22日～	国立大 前期・後期日程追試験 ※公立大は追試験の入試日を一律に定めていない	
	26日～(公立は～26日)	合格発表	
	～26日(公立は～27日)	入学手続	
	28日～	追加合格者発表 欠員補充第2次募集 出願・試験	
	～30日	入学手続	
～31日	入学手続(第2次締切)		
4月	4月1日	大学入学共通テスト 成績の本人開示	

※国公立大学の実施日程は、上記日程と一部異なる場合があります。詳細は各大学の募集要項等で確認してください。

※私立大学・短期大学の出願期日・試験日・合格発表日等は各大学で設定されています。

※私立大学の総合型選抜は夏以降、年間を通じて実施されています(原則9月以降出願スタート)。詳細は各大学の募集要項等で確認してください。

②大学の動き

■学部・学科の新設・再編

1) 国公立大では理工系学部の再編が目立つ

【図表3】は現在判明している2021年度の主な国公立大の学部・学科の新設・改組の動きである。

学部の新設では、群馬大（情報）、金沢大（融合）、岐阜大（社会システム経営）、和歌山県立医科大（薬）などが予定されている。金沢大の融合学域は、文系・理系に偏らない分野融合型教育を行うとしており、入試も文系・理系問わず受験できる科目となっている。和歌山県立医科大の薬学部は、6年制の薬学科のみの構成である。

理工系学部では再編の動きが目立つ。九州大（工）では6学科から12学科に再編される。一般選抜では学科をグルーピングした「学科群」で募集するほか、入学時に学科群を特定しない学部一括入試を実施する。岡山大では、工、環境理工の2学部を工学部の1学部1学科に再編、宮崎大（工）も7学科から1学科に再編する。複数学科を1学科に改組してコース制やプログラム制を導入することで、教員の配置や定員管理をより柔軟に行うことができるため、近年、国公立大ではこうした動きが進む。

また、来春は公立の大学で、三条市立大（新潟県）、叡啓大（広島県）の2大学、専門職大学で国際観光芸術専門職大（兵庫県）が新設予定である。3大学とも初年度の一般選抜は共通テストを課さず、大学独自試験のみとなる。

【図表3】国公立大 主な学部・学科の新設・改組の動き（抜粋）

大学	学部新設・改組の内容
福島県立医科	保健科学部を新設
群馬	情報学部を新設
	理工学部5学科→2類に再編
金沢	融合学域を新設
岐阜	社会システム経営学環を新設
和歌山県立医科	薬学部を新設
神戸	海洋科学部→海洋政策科学部に改組
岡山	工学部・環境理工学部→工学部に再編
島根県立	総合政策学部→国際関係学部・地域政策学部に再編
九州	工学部6→12学科に再編
宮崎	工学部7→1学科に再編

※河合塾調べ、8月現在（予定を含む）

2) 私立大では来春も多くの学部・学科が誕生予定

私立大では、幸福の科学大、松本看護大、大阪信愛学院大の3大学が新設予定だ。専門職大学は、来春は4大学が認可申請している。一方、上野学園大では学生募集を停止する。大阪医科大と大阪薬科大は統合し、大阪医科薬科大となる。

学部・学科の新設の動きは来春も盛んである。近年、医療系の新設が盛んだが、なかでもリハビリテーションなど医療技術系の新設が目立つ。

難関大における学部・学科の新設、再編では理工系が注目される。関西学院大では理工学部を理学部、工学部、生命環境学部、建築学部の4学部に変更する。南山大（理工）は3学科から4学科構成となり入学定員増となる。中央大（理工）は経営システム工学科からビジネスデータサイエンス学科へ名称変更するほか、前述の南山大にもデータサイエンス学科が誕生する。難関大でもデータサイエンス分野の選択肢は広がりそうだ。

東京理科大（経営）では国際デザイン経営学科が新設される。これに伴い、既存の経営学科では入学定員が140名減となるので注意したい。

2021年度の学部・学科の新増設の詳細は、p.17からの「新増設予定大学・学部・学科一覧」をご確認いただきたい。

③入試の変化

■新入試への移行に伴う入試変更

2021年度入試はいよいよ新入試へ移行する。ここからは、2021年度入試にみられる動きについて紹介する。

1) 学校推薦型・総合型選抜—新規実施の拡大と共通テスト必須化

国公立大では、学校推薦型・総合型選抜を拡大する動きが続く。**【図表4①】**は学校推薦型・総合型選抜を新たに導入・拡大する主な国公立大の一覧である。小樽商科大や愛知教育大は、大学として新たに総合型選抜を導入する。弘前大や秋田大、山梨大では募集人員を大幅に拡大する。東北地方の大学は、入学定員に対する学校推薦型・総合型選抜の募集人員の割合が高い傾向にあり、表中の弘前大では全体の32%、秋田大で全体の30%、東北大で全体の28%を占める。

学校推薦型・総合型選抜では、学力を確認する評価(小論文、実技、教科・科目に係るテスト、資格・認定試験の成績、大学入学共通テストなど)の必須化が求められており、国公立大では共通テストを課す大学が増加している**【図表4②】**。来春は京都大(医-医)の特色入試をはじめ、北海道大(水産、歯など)、筑波大(人間-心理)などが新たに共通テストを課す。

【図表4①】 国公立大 学校推薦型・総合型選抜を拡大する主な大学の募集人員の変化

大学	一般		総合型	学校推薦型
	前期	後期		
小樽商科	300 (-20)	70	20 (+20)	115 (+5)
弘前	716 (-85)	178 (-6)	428 (+91)	
東北	1600 (-63)	93 (-5)	657 (+68)	
岩手	615 (-20)	149 (-12)	88 (+55)	178 (-23)
秋田	513 (+2)	134 (-9)	179 (+86)	103 (-81)
東京都立	887 (-95)	210 (-2)	50 (+8)	381 (+57)
金沢	1539 (+258)	(-290)	88 (+79)	82 (-64)
山梨	416 (-48)	171 (-20)	134 (+126)	104 (-58)
愛知教育	507 (-75)	92 (-33)	34 (+34)	226 (+68)
京都府立	268 (-2)	48 (-11)		138 (+29)
九州工業	453 (-16)	187 (-55)	95 (+51)	206 (+20)

※河合塾調べ

【図表4②】 国公立大 学校推薦型・総合型選抜で共通テストを新たに課す主な大学

大学	学部(学科)	新規で共通テストを課す選抜
北海道	理(地球惑星科学)	総合型選抜
	水産	総合型選抜
	歯(歯)	総合型選抜
秋田	教育文化(地域文化)	学校推薦型選抜
筑波	人間(心理)	学校推薦型選抜
千葉	看護(看護)	学校推薦型選抜
京都	医(医)	学校推薦型選抜(特色入試)
広島	文(人文)	総合型選抜
長崎	教育(小学校教育)	総合型選抜
	教育(実技系を除く)	学校推薦型選抜
	医(保健)	学校推薦型選抜
	水産(水産)	学校推薦型選抜
宮崎	医(看護)	学校推薦型選抜

※河合塾調べ

私立大でも、総合型選抜拡大の動きがみられる。慶應義塾大（総合政策、環境情報）では、AO入試の募集人員を各100名から150名に拡大、国際基督教大でも総合型選抜を45名から65名に拡大する。このほか、東邦大（医）では総合入試を、摂南大（農）では総合型選抜AO入試を新規実施する。

学校推薦型・総合型選抜の拡大に伴い、一般選抜の募集人員を減員するケースがあるので注意したい。

2) 共通テスト「英語」リーディング、リスニングの配点比 各大学で対応分かれる

共通テスト「英語」はセンター試験からの変更が多い。「筆記」は「リーディング」に改称され、センター試験で出題されていた、発音、アクセント、語句整序などを単独で問う出題はなくなる。「リスニング」では、音声の読み上げられる回数が、問題により1回読みのみとなり、2021年度の共通テストでは6問中後半の4問が1回読みとなる。

上記に加え、共通テストはリーディングとリスニングの配点比が「1：1」となる。そのまま「1：1」で利用する大学のほか、センター試験時の「4：1」や「3：1」などさまざまなパターンに分かれる。**【図表5】**は主な大学の共通テスト「英語」のリーディング・リスニングの配点比率の一覧である。難関国立大のなかでも、東京工業大や一橋大などでは「1：1」、京都大や大阪大などでは「3：1」、今年からリスニングを新規利用する東京大では「7：3」と、状況が分かれている。大学によっては学部・学科・方式によって配点比率が異なるケースもみられる。

私立大についても、国公立大と同様、リーディングとリスニングの配点比はさまざまなパターンに分かれている。各大学の配点比については、Guideline関連資料ダウンロードWEBページ（目次参照）に、各大学の状況をまとめた資料を掲載している。個別の大学の状況はそちらでご確認いただきたい。

【図表5】 主な国公立大学 共通テスト「英語」リーディング：リスニング配点比設定状況

1：1	4：1	3：1	7：3
旭川医科、小樽商科、札幌医科、 北海道 、青森公立、弘前、秋田県立、群馬県立女子、お茶の水女子、東京学芸、 東京工業 、一橋、上越教育、長岡造形、長野、静岡文化芸術、豊橋技術科学、名古屋工業、三重県立看護、福知山公立、公立鳥取環境、広島、鳴門教育、 九州 、九州工業、福岡教育、福岡県立、大分県立看護科学、鹿屋体育、名桜	釧路公立、公立はこだて未来、青森県立保健、宮城、国際教養、福島、茨城、筑波、群馬、群馬県立県民健康科学、千葉、東京芸術、神奈川県立保健福祉、新潟、信州、愛知教育、名古屋市立、滋賀医科、京都教育、京都工芸繊維、 神戸 、神戸市外国語、神戸市看護、奈良教育、奈良女子、鳥取、島根、岡山、広島市立、山口、徳島、香川、香川県立保健医療、高知工科、長崎、熊本	北見工業、 東北 、宇都宮、電気通信、東京医科歯科、新潟県立、新潟県立看護、石川県立看護、福井、岐阜、静岡、浜松医科、 名古屋 、 京都 、 大阪 、大阪市立、佐賀	茨城県立医療、 東京 、福井県立、下関市立
			3：2
			帯広畜産、岐阜薬科、宮崎公立、沖縄県立看護

※河合塾調べ、8月現在

3) 主体性等評価導入の動き

教科試験が中心だった一般選抜では、主体性等の評価の導入が求められている。国公立大を中心に、面接の導入、調査書や志願者本人が記載する志望理由書などを点数化する動きが相次いでいる。

面接では、国公立大の教育系・医療系の学部で新規導入が目立つ。北海道大（歯-前）や東北大（歯-前）、大阪大（薬-前）といった難関大でも新規導入し、それぞれ面接を点数化する。

調査書の点数化では、信州大や愛知教育大、長崎大などで新たに実施する。当初、調査書点数化の動きは、さらなる広がりを見せていたが、コロナ感染症拡大による高等学校等の休業への配慮から、2021年度は利用を見送る大学が相次いだ。筑波大や福島大、熊本大などが調査書の点数化を取りやめた。

志願者本人が記載する書類等の活用も拡大している。弘前大（一部の学部を除く）や東京農工大、大分大（理工-後）などが来春より志願者本人が記載した志望理由書の提出を求めている。

私立大では、慶應義塾大や早稲田大など首都圏の大学を中心に、出願時に志願者本人に志望理由やこれまでの活動などについて提出させる大学がみられる。多くは提出させるものの合否判定には利用せず、入学後の参考資料として扱う

としており、国公立大に比べて、主体性評価の扱いは消極的な印象だ。

■その他の変更点

1) 国公立大—後期日程縮小・廃止の動きが続く

国公立大では、後期日程縮小・廃止の動きが続く。金沢大では全ての学部・学科で後期日程を廃止する。このほか、北海道大（歯）、東京工業大（生命理工）、香川大（医—医）、愛媛大（医—医）でも後期日程を廃止する。

2段階選抜の変更では、東京工業大、大阪大（人間科学—前）などで新たに2段階選抜を実施する。東京工業大では、これまでセンター試験に950点中600点という基準点を設定していたが、共通テストでは基準点をなくし、志願倍率が4倍を超えたら2段階選抜を実施する。

大掛かりな入試変更を行うのが筑波大である。筑波大では2021年度より、学群・学類の枠を越えた「総合選抜」を導入する。前期日程のみで実施し、4つの選抜区分（文系・理系Ⅰ・理系Ⅱ・理系Ⅲ）に分けて募集を行う。総合選抜の入学者は、一部を除き、全ての学群・学類に進学可能で、2年次以降に所属が決まる。なお、従来からの学類別の入試枠（名称は「学類・専門学群選抜」に変更）も継続されるが、総合選抜の導入に伴い、人文・文化—日本語・日本文化、情報—知識情報・図書館の2学類では、前期日程の学類単位の募集はなくなるので注意したい。

2) 私立大—大掛かりな入試変更や英語4技能評価が進む

私立大では、これまでセンター試験の成績を利用してこなかった上智大、学習院大で2021年度より共通テストの成績を利用する。上智大では、英語資格・検定試験「TEAP」の成績を利用する「TEAPスコア利用型」、個別試験と共通テストを併用する「学部学科試験・共通テスト併用型」、共通テストのみ利用する「共通テスト利用型」の3方式を実施する。いずれも英語資格・検定試験か共通テストのどちらかの成績が必須となる。学習院大では、一部の学部・学科を除き、「大学入学共通テスト利用入学者選抜」を新たに実施する。

大掛かりな入試変更をする大学もみられる。青山学院大では、一般選抜のメイン入試である「個別学部日程」を大きく変更する。一部の学部・学科や方式を除き、共通テストを併用するほか、大学が課す個別試験では、学部・学科ごとの独自の試験を実施する。早稲田大（政治経済）もメインの「一般入試」では、共通テスト4教科を必須とし、学部独自試験と併用する。立教大では、個別学部日程を廃止し、全学部日程を複数日実施する。全学部日程では、大学独自の「英語」の試験を廃止し、共通テスト英語または資格・検定試験の成績を利用する。

私立大の一般選抜で英語資格・検定試験を活用する動きが拡大している。東北学院大では英語・資格検定試験利用選抜を全学部拡大する。愛知学院大や愛知淑徳大では新たに英語資格・検定試験の成績を一部の方式で活用できるようになる。大学入試センターが英語資格・検定試験の成績を管理する「大学入試英語成績提供システム」の導入は見送られたが、英語資格・検定試験を活用した入試は今後も広がっていくと想定される。

共通テスト「英語」については、これまでリスニングを課さない、もしくは筆記と筆記+リスニングのうち得点が高い成績を利用するなど、リスニングの成績が不要だった中堅大を中心に、リスニング必須とする動きが目立つ。専修大や日本大、京都産業大などでは、リスニングの成績を必須とする学部・学科・方式を拡大する。

3) コロナ感染症に関する各大学の対応について

コロナ感染症に関する各大学の対応も徐々に明らかになっている。ここでは影響が大きいものをいくつか紹介する。

国公立大では、横浜国立大、長野県立大（一部の学部）などで2次試験の実施を取りやめるほか、北見工業大、福井県立大など、流行状況により2次試験を取りやめることを予告する大学がみられる。オンライン面接や小論文の事前提出への切り替え、実技は動画提出とするなど、受験者の移動が伴わない選抜方法への切り替えを検討する大学もみられる。沖縄県立芸術大学は、郵送、オンラインメール等を利用した遠隔入試を導入する。名桜大もオンライン面接や事前提出型小論文等の導入を検討している。こういった大学では、例年とは異なる準備が必要となる。生徒には志望校の発表内容を確認させたい。

私立大では、学習院大（国際社会科学）で英語資格検定試験利用型のプラス試験の実施を中止、東海大（工—航空宇宙—航空操縦学）では在学生の留学中断の影響などにより、来春の新入生の受け入れを中止する。立命館大では、3月

実施の共通テスト方式に従来からの4教科型に加え、3教科型、5教科型を追加する。青山学院大や中央大では、活用できる英語資格・検定試験の種類を拡大する。

一般選抜における各大学のコロナ感染症への対応については、Guideline関連資料ダウンロードWEBページ（目次参照）に、各大学の対応一覧を掲載している。個別の大学の状況はそちらでご確認いただきたい。

以上、2021年度入試について主なトピックスや変更点を中心に紹介した。入試情報サイト「Kei-Net」では今後も入試の最新情報や模試からみた入試動向を掲載していく。そちらもぜひご利用いただきたい。